

1月第4週の礼拝説教

■日時：2023年1月22日（日）10：30－11：30 降誕節第5主日

■説教：保科けい子 牧師

■説教題：「聖書の言葉の実現」

■聖書：ルカによる福音書4章16～30節（新約p107）

■讃美歌：17「聖なる主の美しさと」451「くすしきみ恵み われを救い、」

先週の木曜日1月12日の朝、バッハのゴールドベルク変奏曲（グレン・グールド、おそらく1981年にグレン・グールドが弾き、録音したもの）のCDを夫がかけたので聞いていたら、ピアノの音が普通に聞こえてきました。これまで20年以上、ラジオやCDなどを自分から積極的に聞こうとすることもなく、数多くの演奏会や子供たちの発表会などに出かけていましたが、音が心に入ってくるのがなかったので非常に驚きました。具体的に意識してはいなかったのですが、長男にピアノの道を強制して彼の人生を歪めてしまったのではないかと、という罪悪感に長年捕らわれていたのだと思います。（もちろん彼は、ある時点で母親の束縛から抜け出し、自分自身の道を見出して歩んでいるのですが。）ところが、新年になって本日の聖書の箇所を毎日繰り返し黙想しているうちに、主イエスのお読みになったイザヤ書のみ言葉「**主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。**」が、心に迫ってきました。そして、主イエスが「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められたということが、まるで私自身に語られているように伝わってきたのです。それはまさに、私自身が「**捕らわれている人**」と記される状況に長年置かれていたことをきちんと見つめ直すことができ、解放され自由にされた経験であったのです。

さて、本日の聖書箇所にまいりましょう。16節に、「**イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。**」とあります。まさに、安息日の礼拝が始められていました。その礼拝の中では、ユダヤ人の男性は誰でも起立して聖書を朗読することが許されていたようです。その日はイザヤ書の巻物が手渡されました。そこでお開きになると、18節と19節に引用されているイザヤ書61章の1節から2節が目にとまったのです。そして、21節にあるように、「**この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した**」と話し始められました。まさに私たちが今ささげている主日礼拝で言えば、牧師の説教が始まったところと言えるでしょ

う。22 節には、主イエスの言葉を聞いた人々の反応が語られています。「皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて」とあります。人々は主イエスが語られる言葉を「恵み深い言葉」として聞いたのです。しかし、それならば、なぜ「驚いて言った。」のでしょうか。そこには主イエスがお育ちになったナザレの人々が「この人はヨセフの子ではないか。」という思いで主イエスを見ていたことが示されています。マルコ福音書 6 章 3 節には、「この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」と記されています。そのように、小さい頃からよく知っているマリアの息子イエスが、自分たちの会堂で偉い律法学者や祭司のように聖書の言葉を語ったことに彼らは驚いたのです。

23 節で、主イエスは「きっと、あなたがたは、『医者よ、自分自身を治せ』ということわざを引いて、『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ』と言うにちがいない。」と言われました。この後の 31 節以下には、カファルナウムで行なっておられた様々な奇跡が記されています。「あなたがたはそういう奇跡を、郷里のここでもしてくれと私に求めているに違いない」と主イエスは言っておられるのです。つまり、郷里ナザレの人々は、自分たちのよく知っているあのイエスが神の教えを語る権威や資格があるのかと疑い、イエスが神から遣わされた証拠を見せてもらいたい、と思っているのです。砕いていえば、今ここで、あっと驚くような奇跡を見せてくれるなら、お前の言葉を聖書の語る恵み深い言葉として信じてやろう、と侮っているのです。そのような彼らの思いを見抜いておられる主イエスは、24 節で「はっきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。」と言われました。預言者というのは、神様によってみ言葉を語るために遣わされた人です。ですから主イエスも広い意味で預言者と言えます。その預言者は自分の故郷では歓迎されない、それは、その人物を小さい頃からよく知っている人々の間では、神様の言葉であっても「その人の言葉」として聞かれてしまいがちであるということを語っています。

そのような状況の中で、25 節から 27 節で主イエスは、ナザレの人々もよく知っていたであろう旧約聖書におけるエリヤとエリシャの例をあげて語ります。二つの話に共通するのは、自分たちこそ神様の民であり、神様の救いにあずかるのは自分たちだ、と思っている人々には救いが与えられず、それらの人々が異邦人として蔑んでいる人々にこそ救いが与えられた、ということです。まさにそのようなことが、今ここで起っている、と主イエスは語ったのです。28 節、29 節には「これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、29 総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落と

そうとした。」と記されています。主イエスが人々の心の底に潜んでいる本音を明らかにしたときに、人々は主イエスを殺そうとする思いで総立ちになったのです。ルカによる福音書は、この時点で、主イエスがすでに十字架に向かって歩み始められたことを描いているのだと、私は考えています。しかし、まだ福音の伝道を始められたばかりの主イエスは、「人々の間を通り抜けて立ち去られ」ました。短い言葉ですが、そこには人々の人生と主イエスとの接点がないということが明らかにされています。

最後に、もう一度、主イエスの目に留まって朗読され、その内容について語られたイザヤ書 61 章の御言葉について確認しておきましょう。「**主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。**」と始まります。「わたし」と語っている人が、主の霊、私たちの知っている言葉で言い換えるならば、聖霊が自分の上におられると、自分自身を紹介します。その目的は、貧しい人に喜びの訪れを告げるためであるということです。その貧しさの内容が、「捕らわれている人」であり、「目の見えない人」であり、「圧迫されている人」なのです。第一には、その当時の現実的な貧しさを具体的に挙げていると考えることができます。けれども、今の私たちの深いところにある問題も、実はこの三点に当てはめて考えることができるのではないのでしょうか。最初に私自身のことをお話ししましたが、自分でも普段は意識しないところで、「捕らわれている」状態だったのです。「目が見えない」「圧迫されている」いずれも、私たちが普段気づかないところで、私たちが束縛している要素かもしれません。その私たちを深いところから救い出してくださる方、その方こそが「**主がわたしに油を注がれたからである。**」と記されている救い主イエス・キリストなのです。「キリスト」という言葉そのものがヘブライ語の「油を注がれた者」を意味する「メシア」のギリシャ語訳なのです。そのイエス・キリストが「**この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した**」と宣言なさっているのですから、それを私たちは、心から受け入れてまいりましょう。そこに、本当の奇跡が起こってくるのです。